

(二) 黒田官兵衛と播磨

黒田官兵衛

黒田家は、代々御着の小寺氏の家老として仕えていましたが、

黒田重隆^{しげたか}・職隆・孝高三代にわたり、三十五年間姫路城主でもありました。

孝高は、幼少の時から弓や馬術に^{はげ}励み、小寺政職に仕え、家老として政治を助けました。孝高は以前から、織田信長こそ将来を^{たの}頼むべき新興の大武将であるとの見通しをつけて、信長の播磨地方への進出を^{さそ}誘い導いたといわれています。孝高は、^{せんりやく}戦略に^{すぐ}優れ、秀吉の播磨平定には、竹中半兵衛^{はんべ}重治^{えしげ}とともに、はかりごとをめぐらし、また秀吉の天下統一にも大きな力となりました。

一五七八年（天正六年）、主君政職が、荒木村重に従って織田方に^{そむ}背き、毛利方につきましました。このとき、孝高は、小寺家の将来のためにと、主君を説得しましたが、聞き入れられず、逆には^{めく}かられて、荒木氏の有岡城の^{ごくしゃ}獄舎に^と閉じ



国府山城跡

(左下の木立に黒田孝高の父職隆の墓がある)

こめられました。約一か年のろう獄生活のため、脚あしが不自由の身となりました。孝高は、自らみづか姫路城を秀吉に譲ゆずって、妻鹿の国府山城に移りましたが、この城

は姫路から南へ約四キロメートルのところにあり、父職隆が築いた城でした。御着城の固めとして姫路城と結んで、南西面よりの敵に備え、また海を見わたせる城です。孝高は、秀吉の播磨平定の後、秀吉から一万石を与あたえられて、宍粟郡山崎城主となり、その後も各地で戦いました。後に秀吉の九州征伐せいばつに功をたてて、十二万三千石の中津（大分県）城主となり、朝鮮出兵にも参加



十字架のついた鬼瓦（「に」の門の槽^{やぐら}）

しました。

しかし、秀吉の没後^{ぼつご}、関が原の戦いには、子の長政が徳川方について戦い、長政は、福岡五十二万三千石の大大名になりました。孝高は高山右近^{うこん}の勧めで、キリスト教の洗礼^{せんれい}をうけ、シメアンの名をつけられました。姫路城の紋^{もん}瓦^{がわら}に十字架^かのついた鬼瓦^{おにがわら}一個と平瓦^{ひら}が二枚ありますが、これらは、キリシ

タン孝高のものといわれています。

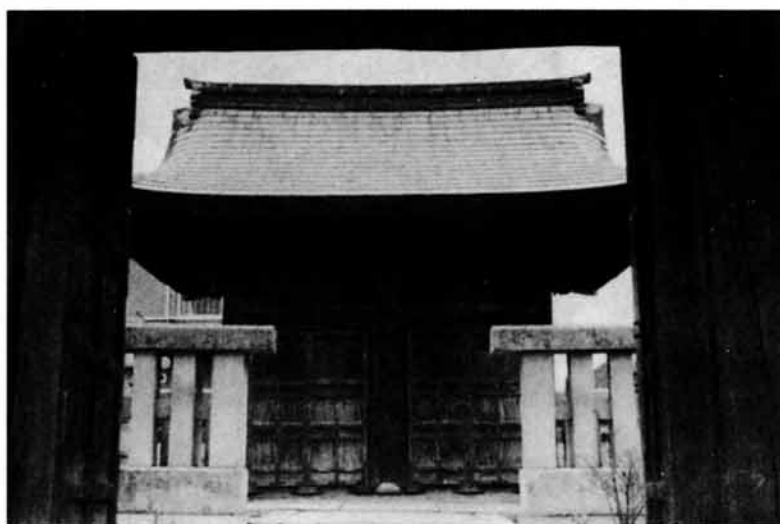
また、かれは主君小寺家の没落^{ぼつらく}後も、その恩^{おん}を忘れず、政職^{せいしき}の遺児^{いじ}氏職^{しじき}がおちぶれて備後^{びんご}（広島県）の鞆^{とも}にいることを知り、秀吉に願って姫路へむかえ、

飾磨津しかもづに住まわせました。後に、福岡において二百石余りを与え、子孫にいた

るまで黒田家の客分として、めんどうを
みました。

御着城 小寺氏は、播磨の守護赤松

氏の一族で、赤松氏の重臣であり、南北朝時代から室町時代にかけて、七代百五十余年間、姫路城を守りました。戦国時代には大いに栄えて、別所氏や三木市とならぶ播磨の武将になりました。一五一年（永正えいしょう一六年）、小寺政隆が御着に城を築いた後、則職・政職の三代六十余



御着の黒田家の廟所（市指定の文化財）

年続きました。が、政職の時に秀吉に攻められて滅びました。

今は城跡しろあとの中央を国道二号線が通り、南北に分けられています。城の北と東には、三重の堀ほりをめぐらし、西と南は天川を利用して守りを固めていました。姫路市東出張所の北側と東側には、今も堀跡が残っています。

旧城内には、三代の城主を祭った小寺明神みょうじんと「筑前ちくぜんさん」と呼ばれている黒田孝高の祖父重隆そふと母を祭ったびやうしよ廟所があります。孝高の父職隆の墓は妻鹿の国府山の南にあります。